

情報文化学会 第6回全国大会 プログラム

テーマ：

インターネット社会と情報文化

主催 情報文化学会

協賛 株式会社NTTデータ

期日 1998年11月28日(土)

会場 明治大学

大学への経路

■JR 中央線・総武線、地下鉄丸ノ内線／御茶ノ水駅下車徒歩3分

■地下鉄千代田線／新御茶ノ水駅下車徒歩5分

■地下鉄三田線・新宿線・半蔵門線／神保町駅下車徒歩5分

(明治大学駿河台校舎アクセスガイド <http://www.meiji.ac.jp/exam/suruga.html>)

<大会プログラム>

期日 1998年11月28日(土)

◆ 情報文化研究発表・作品発表 ◆

会場 明治大学駿河台校舎リバティタワー

9:30～ 受付

総合司会 正木翰彦(情報文化学会常任理事)

9:55～10:00 開会の辞 夏井高人(情報文化学会第6回全国大会実行委員長)

開会挨拶 片方善治(情報文化学会会長)

10:00～12:00 情報文化研究発表・制作発表(午前の部)

(1) A・B会場 [リバティタワー1F 1013教室]

●統一テーマ「インターネット社会と情報文化」(10時～11時)

座長 今井賢(立正大学)

A1 成沢広行(桜美林大学) インターネットと電子商取引が創り出す情報文化

A2 鈴木裕利・横井茂樹・安田孝美(名古屋大学) ネットワーク上の電子的著作権管理システム(ECMS)のシステム構造に関する考察

A3 杉山公弥子・安田孝美・横井茂樹(名古屋大学) デジタルサイエンスミュージアムにおけるインターネットコミュニケーション技術の活用に関する考察

●一般テーマ「芸術・映像」(11時～12時)

座長 増田隆昭(淑徳大学)

B1 田宮良平(インターメディアム研究所) Clothed Body—ファッションデザインとパフォーマンスアートとメディアアートとのコラボレーションによるインスタレーション

B2 平澤洋一(城西大学女子短期大学部) 映像にみる意味指数の変化

B3 茂木 栄(国学院大学日本文化研究所) 祭のCD-ROM制作について

(2) C・D会場 [リバティタワー2F 1021教室]

●一般テーマ「伝統・文化」(10時～11時)

座長 工藤秀幸(麗澤大学)

- C1 鳥野寿章 (大同工業大学) 消えつつある日本伝統工芸 (大阪襦袢の組子襦袢) における技術情報のデータベース化による保存-技術情報保存法の一試案
C2 三好賢周 (明治大学) 京都祇園祭を中心とした考察 (2)

●一般テーマ「生活・福祉・教育」 (11時~12時)

座長 東山禎之 (大妻女子大学)

- D1 三石博行 (金蘭短期大学) 阪神大震災時の新聞紙面の生活情報分析 2
D2 赤司秀明 (日本学際会議) 福祉情報化-高齢化社会における情報文化
D3 宮川清彦 (放送作家) 情報学から見た学校教育の間違い

(3) E会場 [リバティタワー2F 1022教室]

●マルチメディア研究部会 (10時~12時)

座長 石川徹也 (図書館情報大学)

- E1 中田 平 (金城学院大学) メディアの系譜学におけるデジタルメディアの位相
E2 石川徹也 (図書館情報大学) 情報伝達機器・システムの発展と社会的イベント
E3 福留恵子 (N T Tデータシステム科学研究) テレワークが拓げるワークスタイルの可能性
E4 梅本正敏 (N T Tデータ技術開発本部) 来るべきデジタル社会におけるICカードの役割

12~13時 理事会 [リバティタワー23F 伊藤紫虹ホール]

13~14時 第4回情報文化学会賞 受賞記念式典 [リバティタワー1F 1013教室]

司会 正木頼彦 (情報文化学会常任理事)

学会賞の授与 片方善治 (情報文化学会会長)

水野幸男 (情報文化学会賞実行委員会委員長)

14~14時15分 情報文化学会総会 [リバティタワー1F 1013教室]

司会 石部公男 (聖学院大学教授) 総会挨拶 片方善治 (情報文化学会会長)

活動報告 中田 平 (金城学院大学教授) 会計報告 坂本真一郎 (県立宮城大学教授)

14時25分~15時20分 [リバティタワー1F 1013教室]

記念講演 14時25分~15時5分

司会 中島 洋 (慶応義塾大学教授)

- ・関本晃靖 (シリコングラフィクス社 日本/アジアパシフィック担当会長)
「テーマ: ビジュアルコンピューティング--ビジネス創造のコア・テクノロジー」
(日本シリコングラフィクスのホームページ <http://www.sgi.co.jp/>)

記念対談 (15時5分~15時20分)

- ・関本晃靖 (シリコングラフィクス社 日本/アジアパシフィック担当会長)
- ・中島 洋 (慶応義塾大学教授)

15時20分~16時20分 基調講演 [リバティタワー1F 1013教室]

司会 夏井高人 (情報文化学会第6回全国大会実行委員長)

- ・津野海太郎 (「本とコンピュータ」編集長、晶文社取締役)
「テーマ: インターネット社会と出版文化」

16時30分~17時45分 パネルディスカッション

テーマ「インターネット社会と情報文化」

司会 片方善治 (金城学院大学教授・情報文化学会会長) [リバティタワー1F 1013教室]

- ・関本晃靖 (シリコングラフィクス社 日本/アジアパシフィック担当会長 <http://www.sgi.co.jp/>)
- ・津野海太郎 (「本とコンピュータ」編集長、晶文社取締役)
- ・増田祐司 (東京大学教授)
- ・稲垣耕作 (京都大学大学院助教授)
- ・向殿政男 (明治大学理工学部教授 <http://www.sys.cs.meiji.ac.jp:8120/~masao/>)

17時45分~18時 閉会の辞 阪井和男 (情報文化学会第6回全国大会実行副委員長)

18~20時 懇親会 [リバティタワー23F 岸本辰雄記念ホール]

司会 阪井和男 (情報文化学会第6回全国大会実行副委員長)

- ・開催校より挨拶)

阪神大震災時の新聞紙面の生活情報分析 2 生活情報パターン移行現象と情報文化パラダイム

金蘭短期大学 三石博行
E-mail h-mitsuishi@kinran.ac.jp

キーワード 阪神大震災生活新聞情報、新聞情報分析法、生活情報の質、生活情報パターン移行現象、情報文化パラダイム

はじめに

昨年生活情報史観の仮説に基づいて、生活情報の構造分析を行い⁽¹⁾、生命維持に関する第1次生活情報、社会システム維持に関する第二次生活情報と生活のゆとりから発生する第三次生活情報の三つのモデルを立て、阪神大震災時の朝日新聞の記事の分析を行った⁽²⁾。さらに前回立てた情報発生モデルを批判的に検討し⁽³⁾、毎日新聞社及び読売新聞の社内データベースを活用し全文検索で出力された阪神大震災時の生活情報の記事の分析を試みた。これらのデータから理論的に分類された生活情報と、実際に示すそのパターンからの生活情報の再定義が明らかに食い違う現象が生じた。これを生活情報パターンの移行現象と名づけた。この現象は日本社会の状況によって引き起こされている情報文化現象である。この分析を通じて高度資本主義社会や高度情報化社会のパラダイム変化を受けた生活構造変化からシフトされる生活情報の在り方について議論する。

1、全文検索の統計処理の前提条件の確立と相対的重要度変化グラフと生活情報量変化傾向グラフの解釈

新聞記事分析の伝統的な方法に代わって、全文検索されたデータの統計処理による分析が社会分析の手段として可能であるかを検討しなければならない。そのためには以下の問題の解決が前提条件とされている。

検索データの信憑性の確率

まず、全文検索から出力されるデータの信憑性を問題にしなければならない。そのためにはデータを引き出す情報処理の論理的背景に関する点検が必要である。全文検索の場合、もし記事の中に一つでも検索用語があれば、検索結果にその記事が出力されるため、検索用語に関する情報を十分に持ち合わせていない記事も検索される確率が生じる。それらの確率に関しては、理論的に予測する必要がある。またその値と観測によって得られる実際の測定値との差を計算することによって、検索データの信憑性確率を実証的に検証する必要がある。

相対的重要度変化の概念

データの分析手段として用いられている「相対的重要度変化グラフ」の統計処理上の解釈について、先ず、ある期間に於て「阪神大震災」という用語を持つ記事の中で調査したい生活情報の用語を持つ記事の占める割合がその情報の相対的な重要度であると考えた。それぞれの期間でのその情報量の占める割合の傾向を示す「相対的重要度変化」の計量方法に問題があるとは思われない。「相対的重要度変化グラフ」と呼ばれる相対的重要度変化の経年的な変化傾向をプロットして出来上がったグラフを使って阪神大震災に関する記事の中で調査対象の生活情報が占める割合を分析することが出来る。

情報量変化傾向・記事件数割合の概念

測定された全期間の調査対象の生活情報量の総数に対しそれぞれの期間毎で発生したその生活情報量の割合の変化を示すものを「情報量変化傾向・記事件数割合」と呼ぶが、それは、期間毎の母集団情報量に大きなばらつきがある場合は相対的に情報発生分布を比較する事は出来ない。そこで期間毎の全ての記事数とその平均記事数とのばらつき・標準偏差値を測定し、それが極めて小さいという条件を確認しなければならない。毎日新聞記事の分析の場合は偏差値は 0.097 であったので、期間毎の記事件数のばらつきは小さく、生活情報量の割合の変化を示す「情報量変化傾向・記事件数割合」を取ることが可能であると判断し、調査対象の震災後の生活情報発生傾向を観測するために、前記の情報量変化の計量的傾向を全期間を通じそれぞれの期間についてプロットし「生活情報量変化傾向・記事件数割合変化グラフ」を作った。

2、生活情報の構造による相対的重要度変化グラフ及び生活情報量変化傾向・記事事件数割合変化グラフの典型的パターン

衣食住とライフラインなど生命維持に直接関係する生活構造を土台にして発生する情報・第一次生活情報と考えられる31項目、復旧、教育、交通、住宅修理、保険、復興など社会経済システムの維持に関する30項目の第二次生活情報と余暇やイベント、心の問題などの個人が基本的な生命維持や社会生活の維持を確立してその上に必要となる情報・第三次生活情報10項目に関して毎日新聞社内のデータベースを使って調査した。この資料を二つの分析方法、つまり相対的重要度変化グラフと生活情報量変化傾向グラフによって分析した。従属変数は一年間を二週間毎に割った期間として、独立変数はそれらの生活情報とした。上記の二つのグラフパターンを生活構造の質に基づいて解釈・分析し、第一次生活情報、第二次生活情報と第三次生活情報の典型的パターンを示すと思われる例を以下に述べる。

典型的第一次生活情報のパターン

第一次生活情報は一般に生活情報変化量傾向グラフは震災直前に情報の発生が集中する傾向を示す。この減少傾向はこの生活構造の復旧状況によって異なる。例えば相対的重要度平均値が2.56%を示す「食」の情報は、震災後に問題の解決が即座になされたため震災二週間以内で30.25%発生したが、二週間以後9.52%に急激に減少し更に三ヶ月後に2.52%に殆ど指数関数的に減少する。また、相対的重要度もこの期間では緩やかに減少している。

表1、「食」の情報の発生状態の変化

	平均値	2週間目	4週間目	6週間目	8週間目	10週間目	12週間目
相対的重要度	2.56%	6.47%	2.14%	2.25%	1.99%	1.85%	1.68%
記事事件数割合		30.25%	9.52%	8.12%	5.60%	3.92%	2.52%

また、相対的重要度平均値が2.56%を示す「水 or 飲」の情報は、震災後に直ちに問題が解決されなかったため、経年的減少傾向は上記の「食」よりも表2に示すように緩やかであるがしかし顕著に減少している。同じように相対的重要度も緩やかに減少している。

表2、「水 or 飲」の情報の発生状態の変化

	平均値	2週間目	4週間目	6週間目	8週間目	10週間目	12週間目
相対的重要度	21.00%	26.30%	22.22%	24.48%	21.73%	18.92%	17.35%
記事事件数割合		14.97%	12.04%	10.74%	7.44%	4.88%	3.17%

この二つが典型的な第一次生活情報のパターンを示すものと考えられる。それらは共に相対的重要度変化は緩やかに減少し、記事事件数割合は問題解決の状況によって多少の差はあるものの、顕著に減少している傾向を持っている。

典型的第二次生活情報のパターン

第二次生活情報は、一般に復旧や復興の課題と共に発生するため震災直後に急激に現れることはない。この情報のパターンは解決しなければならない社会的システム上の問題によって二つの傾向を持つ。例えば、相対的重要度平均値が19.99%の高い値を示す「(アパート or 団地 or 家 or 住 or マンション)and(修 or 建)」の記事事件数割合は、震災二週間以内で11.21%発生し、二週間以後9.92%に減少し更に三ヶ月後に2.83%に線形関数的に減少する。また、相対的重要度もこの期間では大きな上下運動をしているが、一年間を通じて緩やかに増大している。この場合は、社会的関心が非常に高い生活情報であり、しかも時間が経つにつれて重要度が増している。

表3、「(アパート or 団地 or 家 or 住 or マンション)and(修 or 建)」の情報の発生状態の変化

	平均値	2週間目	4週間目	6週間目	8週間目	10週間目	12週間目
相対的重要度	19.99%	18.75%	17.43%	13.60%	23.63%	15.61%	14.74%
記事事件数割合		11.21%	9.92%	6.27%	8.49%	4.23%	2.83%

次の例は、相対的重要度平均値が2.16%の値を示す「雇用」情報である。この記事事件数割合は、震災二週間以内で3.64%発生し、二週間目で13.25%に増大し更に四週間目で13.58%となりその後は減少し三ヶ月後に1.32%に減少する。その後は多少の上下を繰り返しながら、一年後まで平均的に一定している。また、相対的重要度もこの期間では記事事件数割合に比例して増大減少運動をしているが、一年間を通じては上下運動はするものの平均して緩やかに増大している。この場合は、社会的関心度の高い生活情報ではないが、年間を通じて常に問題にされている情報である。

などのライフラインであると考えられたが、都会では交通機関は生活の基本的要素になっている。そのため、これらの交通機関に関する情報が第一次の様相を帯びることは想像できる。また、同様のことはゴミや廃棄物でも言える。こうしたものを放置することは衛生的問題に直接関わることになる。都会的生活の中ではこれらの要素が第一次の生活情報のパターンになる可能性を秘めている。

また下の表 8 に示した第三次パターンから 3-c の心の問題に関する情報は衣食住を基本とする第一次生活情報の定義から、その分類が第三次に送られる結果になった。しかし、心の問題は人間の生存条件の基本を作り出すものであり、この情報が一次のパターンを取ったのは非常に興味ある事であった。言い換えるとこれは新聞記事化という文化現象の結果であると考えられる。新聞記者や編集部の思惑を越えて記事に反映されている文化的姿である。また、3-d のボランティアが二次のパターンを示したことは、阪神大震災ではボランティアは単に自然発生的に組織されたのではなく、NGO など民間団体や行政がそれらを組織し復旧のために積極的に活用した。そのため、このボランティアは社会システムの中に組み込まれた形態をもつことになり、それらの情報が当然二次的な様相を帯びたと考えられる。

表 8、第三次生活情報パターン分類

番号	パターン種類	生活情報の項目	
3-a	三次典型パターン1	コンサート	イベント
3-b	三次典型パターン2	孤独or独り暮らし	
3-c	三次から一次への移行形	(子供or児童)and(不安or恐怖)	(心or精神)and(障害or病気)
3-d	三次から二次への移行形	ボランティア	

以上のように、生活情報パターンの移行現象は社会システムの構造的問題をその土台に持っている。演繹的に導かれた生活情報の分類を、新聞情報の分析を通じて帰納的に検証できる。また、これらの検証作業では、この移行現象の背景の解釈について触れなければならないのである。

4、情報文化パラダイムと情報発生装置・社会身体

生活情報や社会情報を生み出すものは社会身体である。その中に生活構造は含まれている。生活情報論を語る時、生活構造論学説史の点検が必要となるように⁽⁴⁾、社会構造の在り方から変化する情報形態の移行現象である生活情報移行現象を理解するには、情報文化パラダイムの課題に触れる必要がある。何故なら、分析対象である新聞情報は、新聞記者や新聞社の主観的意図を越えて、文化現象としてあることを理解する必要がある。あるいはそれを市場の原理として語ることもできるが、社会身体の観念形態・イデオロギーの在り方がそれらの記事や情報として具現化される。

生活情報パターンの形成も社会身体の活動結果によるもので、社会身体を情報発生装置として理解すれば、そこにはその観念形態を再生産するメカニズムがあり、情報文化パラダイムに則して社会身体のメカニズムが機能し、そこに情報のパターンが生みだされる。これがここで言う情報発生装置の質を決定している情報文化パラダイムである。

今、情報発生に関するパターンの移行現象があるとすれば、それは明らかに社会・文化構造の変化によるものである。第一次生活情報の概念が今までの人間社会学や生活科学のパラダイムの中に留まるかぎり、先に示した現象の解釈は困難であろう。

注

- 1 三石博行「生活情報構造モデルと生活情報史観」 in 「社会・経済システム論学会 1997 年第 16 回全国大会報告要旨集」、社会・経済システム論学会、関西大学、1997.11. pp3-6
- 2 三石博行「阪神大震災以後の生活情報発生調査と生活情報構造分析」 in 「第 5 回情報文化学会全国大会講演予稿集」、情報文化学会、東京工業大学、1997.11. pp20-23
- 3 三石博行「シソーラス検索による新聞情報の分析方法とその批判」 in 「第 3 回日本社会情報学会大会発表要旨集」日本社会情報学会、東京大学、1998.10. pp52-55、
- 4 三石博行「社会システム論的生活構造論学説史批判と現代生活情報論の科学性批判」 in 「社会・経済システム論学会 1998 年第 17 回全国大会報告要旨集」、社会・経済システム論学会、京都精華大学、1998.10.

表4、「雇用」の情報の発生状態の変化

	平均値	2週間目	4週間目	6週間目	8週間目	10週間目	12週間目
相対的重要度	2.16%	0.66%	2.52%	3.19%	1.89%	2.38%	0.75%
記事件数割合		3.64%	13.25%	13.58%	6.29%	5.96%	1.32%

以上、二つの第二次生活情報の典型例を示した。これらは共に震災直前に高い値を示さないものの、その後短期間の間に増大し、そして減少する傾向を持つ。また相対的重要度は一年を通じて少しだけ増大する。

典型的第三次生活情報のパターン

第三次生活情報は、一般に基本的な生命維持の第一次や社会生活の維持のための二次の生活情報に比べて、多様で個人的な情報であるため震災直後に急激に現れることはないし、その相対的重要度も震災直後には存在しないと考えられる。例えば、相対的重要度平均値 1.96%の少ない値を示す「イベント」の記事件数割合は、震災二週間以内で 1.47%発生し、二週間目で 4.03%と増大し多少上下しながらも三ヶ月後に 5.86%と増大の方向にある。増大は 20 週目つまり五ヶ月目まで続くが、その後は平均して同じ値を一年後まで取る。また、相対的重要度は一年間を通じて増大する傾向を取る。この生活情報は震災直後より時間が経つに従い増大し続ける。

表5、「イベント」の情報の発生状態の変化

	平均値	2週間目	4週間目	6週間目	8週間目	10週間目	12週間目
相対的重要度	1.96%	0.24%	0.69%	0.78%	1.50%	1.19%	2.99%
記事件数割合		1.47%	4.03%	3.66%	5.49%	3.30%	5.86%

第三次生活情報の典型例を一つだけ示したが、これらは共に震災直前には殆どなく、時間が経つにつれて発生する生活情報で、その重要性は時間が経つにつれて増大する。

3、生活情報パターン移行現象とその解釈

しかしながら、調査された全ての生活情報が予め想定された生活情報の構造パターンを取るとは限らなかった。予め分類された生活情報のパターンと実際にデータが異なる例を示す。先ず、幾つかの第一次生活情報のパターンに関して次の表6に示す。

表6、第一次生活情報パターン分類

番号	パターン種類	生活情報の項目			
1-a	一次典型パターン1	食	毛布	行方不明	電気
1-b	一次典型パターン2	水道	ライフライン	ガスand復旧	
1-c	一次典型パターン3	電話	アパートor団地	水or飲	避難所
1-d	一次から二次への移行形1	死者	死亡者or 犠牲者or犠牲に	病院or 診療所or病院	ガス
1-e	一次から二次への移行形2	保険and 家	炊き出し		

パターンの分類から第一次生活情報の中で第二次生活情報と近いパターンを示すものの中で、1-eに分類した炊き出しがあるが、食生活の豊かになった日本では震災直後の炊き出しも生命を維持する緊急な行為というよりイベント的な要素が入り込んでしまっているのではないかと考えられる。従って、その情報は典型的な第一次のパターンから外れる。また保険 and 家に関する情報はそれ自体が二次的要素を持つ。1-dに分類された死者や犠牲者の情報は典型的な一次情報であるが、それらは防災対策、復興、危機管理など社会システムの再構築の課題と結び付き時間が経つてもかなりの頻度で発生しているため、二次的要素が入り込む結果になっている。

表7、第二次生活情報パターン分類

番号	パターン種類	生活情報の項目		
2-a	二次典型パターン1	保険	都市計画	雇用
2-b	二次典型パターン2	再建	仮設住宅	(アパートor団地...)and (修or建)
2-c	二次から一次への移行形1	復旧	学校	(窓口or相談)and (市or行政)
2-d	二次から一次への移行形2	入試	廃棄物or ゴミ	学校and授業
2-e	二次から一次への移行形3	鉄道	道路	交通or輸送

さらに幾つかの第二次生活情報のパターンに関して表7に示す。2-eの鉄道や道路に関する情報は一次的なパターンを示す。一般に第一次生活情報は原則的に衣食住とガス、水道、電気、電話